

人は動物を見てどのようなことばを語るのか

—水族園における来園者の会話についての一考察—

博士後期課程 3回生 門 多 真 弥

神戸市立須磨海浜水族園 海獣飼育課 古 田 圭 介

神戸市立須磨海浜水族園 研究教育部長, 岡山理科大学生物地球学部 教授 亀 崎 直 樹

発達教育学部 准教授 古 池 若 葉

発達教育学部 教授 大 矢 大

要約

人は、感情や思考を、表情や態度だけではなく、ことばにあらわし他者に伝える。しかし、人と動物の関係を紐解く研究の中で、人のことばに焦点をあてたものは決して多くはない。そこで、人が動物をみてどのようなことばを発するのか、そこにどのような意味が込められているのか、水族園で飼育されている「大水槽のサメ・エイ」「クラゲ」「ピラルク」「カメ」「ラッコ」「イルカ」の6つの動物を刺激として用いて比較し、検討することにした。

結果、人は、動物ごとに異なる意味のことばを発することが分かった。特に、ラッコとイルカでは、人は親和感情に関することばを強く示した。また、特筆すべき点として、イルカでは、「この子、さっき私たちの方みてたよね？」など個体を識別するようなことばが得られた。これは、他の動物とは大きく異なる反応と言え、人がイルカの個性に注目し、他の動物よりも親しみを持ってイルカを認識していると考えられる。Levinson (1969) は、面接に介在する動物は、子どもなど、ことばで自己を表現することが難しいクライアントが自己を投影することのできるもの、と述べている。このイルカへの親近感は、人がより円滑に、自己を投影することができる可能性を示しているだろう。

キーワード：イルカ、動物介在療法、動物介在活動、ことば

1. 初めに

人は、思考や感情を、表情や態度だけではなく、ことばにあらわし他者に伝えている。いわゆる「アニマルセラピー」の最初の報告を行った、アメリカの臨床心理学者のLevinson (1962) の報告にも、人のことばについて記されている。彼は、長期の引きこもりだった無口な8歳の少年が、偶然Levinsonの飼い犬であるJinglesと出会うと、急にJinglesに積極的に語りかけ始めたことと報告した。Jinglesが治療の場にいることで、最終的に少年に好ましい変化が見られたことを、

彼は“The Dog as a ‘co-Therapist’”という論文で発表している。このLevinsonの報告を出発として、欧米では、アニマルセラピーについての臨床的研究が次々となされていった。この「アニマルセラピー」は、米国の「人と動物の相互作用に関する実践、普及、研究活動を支援する」ことを目的に設立された組織、Pet Partners (旧デルタ協会) によって、動物介在療法 (Animal Assisted Therapy : AAT)、そして動物介在活動 (Animal Assisted Activity : AAA) の2つに定義された。動物介在療法 (AAT) は、

人と人との治療的な関わりに動物を介在させる手法であり、治療目標を設定したプロセスである。一方の、動物介在活動 (AAA) は、人と動物の絆を利用して対象となる人の生活の質の向上を目的とした、動物とのふれあいなどを中心とした活動をいう。この、AAT・AAAのどちらもが、人と動物の関わりを用いるものであり、この中で、人はことばを用いて多くの表現を行っている。性的虐待を受けた子どもに対するグループ心理療法にイヌを同席させると、子どもたちがイヌを利用して、その語りが促された例 (Reichert, E, 1994) や、イルカとのキャッチボールなどの触れ合いを通して、言語障害でほとんど発声することがなかった自閉症の少年が声を上げてイルカの興味を引くようになった例 (Smith, 1996) などが報告されている。このように、人は、動物と触れ合うことで、ことばを用いて表現を行うことがわかってきた。

しかしながら、先行するAAT・AAAに関する研究では、動物の介在により人がことばで何らかの表現をする、という報告は多くされているものの、そのことば自体に焦点を当てたものは、筆者の知る限り多くはない。もしも、動物の種類によって人の発することばの表現が変化するのであれば、今後、AAT・AAAを行う中で、場面や状況、必要に応じた動物を介在させるなど、取り組みの幅が広がり、AAT・AAAをより効果的に施行できる可能性は広がるだろう。

筆者は、現在、神戸市須磨海浜水族園 (兵庫県) で共同研究を行っている。水族園と言う場所は、多くの動物が展示されている。そこで、水族園のいくつかの動物を刺激として用いて、人のことばを比較することで、どのような違いが生じるのか、検討することにした。そこから、AAT・AAAの領域のさらなる発展の一助とした。

2. 方法

①. 調査対象・調査時期

2011年11月-12月 神戸市須磨海浜水族園

の来園者に対し、ICレコーダーを用いた会話の録音を依頼し、調査を実施した。調査協力者は2名のペア5組の計10名で、男女比は3:7で、平均年齢24.5歳 (SD: 2.73) であった。

②. 実施手続き

水族園の来園者に、調査者が、本研究の協力を依頼し、承諾を得られた人物にのみ実施した。調査上の注意事項を説明したのち、協力者のみで水族園内での観覧を求めた。本来であれば、ビデオテープを用いて録画内容の会話・行動すべてを検討対象とする方が、より精密なデータが得られるが、今回は、研究の簡素化を図り使用機器をICレコーダーとし、分析対象を会話のみに変更した。状況を統一するため、協力者は成人2人のグループのみを選出している。

③. 調査内容

協力者に一定の時間、いくつかの動物の水槽の観賞を求め、その間の会話を録音する。会話の時間は解釈可能性を考え各水槽ごとに3分間とした。刺激として用いる動物は6つの水槽で展示される動物を選定した。これは、本水族園での予備調査 (質問紙法による出口調査) でどの動物が印象に残ったか質問し、挙げられた「大水槽のサメ・エイ」「クラゲ」「ピラルク」「カメ」「ラッコ」「イルカ」の上位6つの動物である。大水槽は、水族園入口にある水槽で、サメ・エイなどが中心となった大規模水槽である。その大きなインパクトが、選ばれた理由となっている。クラゲは水族園内にある水槽で展示されており、“ゆらゆらした姿に癒される”などの感想があった。ピラルクは、水族園の別館・大型水槽内に展示されている大型淡水魚で、“大きさにびっくりした”などの感想が多い。カメは、水族園の屋外展示で、外来種である淡水カメを保護・飼育している。予備調査にあわせ、水族園側の希望もあり選出した。ラッコは、水族園別館に展示されており、愛くるしい動きに感想が集中している。イルカは、水族園の屋外プールで、主にショーで活躍するイルカが展示され、

それについての感想が多かった。(ショー非開催時でもイルカの観覧は可能。)

すべての水槽において公正な反応を得るために、協力者にショーや水槽イベントなどの行事を避けた時間帯に観覧するように求めている。また、観覧の順番は、水族園内の立地をふまえ、調査者が設定した。

協力者にそれぞれの水槽とそこに展示されている動物の観覧を求め、動物たちが協力者たちのどの様なことばや感情を引き出すのかを検討する。協力者の自然な姿を引き出す為、調査者は同行しない。

3. 結果

協力者らがICレコーダーに録音した会話(5組×6水槽の計30ユニット)を、文字化し、その内容をKJ法を参考として筆者独自の方法を加えてコーディングした。コーディングの方法は、まとまりのあることばを1つの単位とし、

類似したものを集め、その集めたものに意味付けをするかたちをとった。基本として「可愛い」「変な顔」など短い単語を1つの単位として設定するが、「次のショーまで体体温温してるんだね。」など、長い文章で1つの意味合いを持つことばでは、長文を1単位とみなしている場合もある。5組のグループの中で2組以上に出てきた類似したことばをコーディングし、カテゴリーにまとめたものをTable 1に示す。「かわいい」「ひょうきんな感じ」等の親和的なイメージのあることばをまとめて「親和感情」として名付けるかたちで協力者たちのことばをまとめた。各動物のカテゴリーの数は最少3～最大5と設定している。また、カテゴリーには含まれないものでも、特徴的なことばがあった場合には、特記として記載している。Table 2～6に各水槽ごとのカテゴリーと、代表的なことばの内容を示す。

Table 1 各動物の会話カテゴリー

大水槽 (エイ・サメ)	エイ・サメの見た目について/エイ・サメの生態について/過去・経験の想起/感嘆
クラゲ	好悪のイメージ/美醜のイメージ/水槽やその周辺について
ピラルク	ピラルクの大きさについて/のろまなイメージ/水槽やその周辺について
カメ	カメの生態について/親和感情/カメの個体数について/水槽やその周辺について
ラッコ	親和感情/ラッコの生態について/擬人化的表現/水槽やその周辺について
イルカ	擬人化的表現/親和感情/個体の識別/イルカの生態について/水槽やその周辺について

Table 2 大水槽における会話

カテゴリー	度数	内容
エイ・サメの見た目について	15	エイの顔って人の顔みたい！ 目がつぶら！豆粒みたい！ なめらかそうな肌だねえ
エイ・サメの生態について	8	なんか、エイとかサメとかって、見たら食べる！弱肉強食！ってイメージあるけど、 こうやって小魚と一緒に泳ぐこともできんねやね サメの歯が凄いね あのエイの尻尾って毒針なんでしょ？
過去・経験の想起	6	(本水族園に) 久しぶりに来たわー、こんなかんじやったっけえ？ (他水族園) よりも水槽の感じがイイねえ
感嘆	6	すごい！びっくりした！ みんな、“ひろびろー”とおよいでいいねえ！
特記		この水槽は、小さい群れもおるし、カメもいるし、大型魚もおるし、盛りだくさんやね！

Table 3 クラゲにおける会話

カテゴリー	度数	内容
好悪のイメージ	14	おもしろい！ きもちわるい きもい
美醜のイメージ	10	きれい これは（見た目的に）大丈夫じゃない…！
水槽やその周辺について	7	クリスマスの飾りだー！ フラッシュたくとやっぱ写真撮れないよね…
特記		こんな風にふわふわなんも考えずに漂って生きてたいわ… なんか、このサイズだったら、飼ってみたいかも。

Table 4 ピラルクにおける会話

カテゴリー	度数	内容
ピラルクの大きさについて	13	でかい！若干こわいくらいでかい！ 大きいってのはいいねえ 大きいとゆっくり泳いでるよなあ 無駄にでかい。胴を無意味に引き延ばした感じ。
のろまなイメージ	11	変な顔！マヌケな感じ！ でぶーんとしてるなあ、なんか
水槽やその周辺について	10	水槽が大きいよなー トンネルの形の水槽楽しいね！ この水槽よりも大きな川が世界にはあるんやろ、凄いやなあ
特記		ま、最終的に魚なんて食べられるかそうじゃないかで決まるんだよ！ この魚***（家庭用ゲーム）で出てくる。つったことあるわ私。

Table 5 カメにおける会話

カテゴリー	度数	内容
カメの生態について	25	アカミミガメとカミツキガメどっちがどっちかわかる？ こんなに大きくなるんやね 冬眠とかどうするんやろ？
親和感情	11	かわいい すごい 面白いな
カメの個体数について	8	いっぱいいる こんだけいたら気持ち悪いなあ どんだけおんねや！
水槽やその周辺について	7	餌とか売ってる！ コイも一緒に置いてんねなあ
特記		「ちょっとどいてよ！」「やだよ！」とカメに吹き替えをして楽しむ 「カメって平泳ぎよね、私出来ない」とカメから泳ぎ方を想起する

Table 6 ラッコにおける会話

カテゴリー	度数	内容
親和感情	21	かわいい。可愛いとしか出てこん。 ひょうきんな感じ。 仕草がかわいい。
ラッコの生態について	15	思ってたよりも大きいね 足小っちゃーい！ヒレみたいのついてる 不思議な泳ぎ方するんやね
擬人化的表現	12	じゃれてる！あそんでる。 笑ってるー！ なんか企んでるみたい。
水槽やその周辺について	10	水槽曇ってるの残念 水垂れてる！
特記		いいなー。ここのラッコは、テキトーに泳いで遊んでたら、お姉さんがご飯持ってきてくれるんでしょう？

Table 7 イルカにおける会話

カテゴリー	度数	内容
擬人化的表現	15	遊んでるー 次のショーまで体体温存してるんだね。プロだから！ 頭いいなあ、かしこいなあ！
親和感情	11	かわいい イルカになりたい イルカは“がんばりやさん”ってイメージあるなあ
個体の識別	9	あ！あのさっきからコードで遊んでない？ これ、さっき私たちの方見てた子だよ！ この子、さっきから逆立ちしてるけど大丈夫？息苦しくないのかな
イルカの生態について	8	肺呼吸だっけ？えら呼吸だっけ？ 潮吹いた！
水槽やその周辺について	8	柵の内側はいたらアカンよね 水槽結構深いね
特記		イルカがいっぱいいるところに行って、もう日本に帰りたくないわ！ あんな風に泳げたらな、って思って、スイミング通ってた！

4. 考察

以上の結果をもとに、まず、それぞれの動物について考察を行う。

大水槽（サメ・エイ）では、サメ・エイの見た目や生態について、水族園に来館した過去のエピソードの想起、「すごい」「大きい」などの感嘆のことが示された（Table 2）。この水槽は水族園の入り口すぐに設置されており、いわば水族園の顔ともいえる場所である。そのため、インパクトを持たせるため、大型魚が展示されている。来園者たちは、インパクトのある大型魚の見た目や生態に好奇心をくすぐられるのであろう。また、「すごい」などの感嘆のことが出てくるのではないとも考えられる。そして、水族園と言う場所から「そういえば…」と他の水族園イメージが想起されるのではないかと考えられる。

クラゲでは、好悪や美醜のイメージに関することが多く聞き取れた。「きれい」「（見た目的に）大丈夫じゃない」や、「気持ち悪い」などと、相反する意見が同率で得られた（Table 3）。この結果からは、この動物たちが見る側によって感じ方が大きく変化することを示している。水中でゆらゆらと漂うクラゲの姿は、美しさを想起させる一方で、気味の悪さも生み出しているのだろう。特記には「こんな風にふわふわなんも考えずに漂って生きてたいわ…」ということばがあるが、これは水中を漂う独特の風貌をしているクラゲであるからこそ導き出すことばであると言えるだろう。

ピラルクでは、その風貌（おもに「変な顔」）や大きさについての言及が多く得られた（Table 4）。この魚は、世界最大の淡水魚と言われており、その全長は3mを越すこともある。これを見る人々が「おおきい」と言うのは非常に自然なことである。しかし、特筆すべきは風貌についての言及である。「変な顔」「でぶんとしてる」「無駄にでかい」などということばからは、親近感は感じられない。ピラルクを見る時、人はその大きさに驚き感銘を受けるものの、親和的な感情を持つことは少ないと言える

だろう。

カメでは、カメの生態・個体数に関することばや親和感情が多く聞き取れた（Table 5）。カメは、われわれの日常でペットとしても親しまれており、先に述べてきた動物たちと比べるとより身近な存在であると言える。身近であるからこそ、「より深く知りたい」という感情が芽生え、生態について考えることばも多くなったのではないだろうか。また、この水槽には、隣に「研究施設」という看板を立てており、それを見て来園者の知的な好奇心が刺激されたとも考えられる。

ラッコでは、親和感情やラッコの生態について、また擬人化的表現に関することばが多く得られた（Table 6）。「かわいいとしかでてこん」「ひょうきんな感じ」ということばからは、ラッコに対して協力者たちが非常に好意的なイメージを持っていることが伺える。ラッコの仕草や表情が、われわれに、この動物への親しみやすさを感じさせているのであろう。また、そのしぐさから「不思議な泳ぎ方する」など生体への興味につながっている。また、ラッコには「遊んでる」「笑ってる」など擬人化的な表現も多く得られた。他の動物には見られなかった反応である。これは、人がラッコに対しより親近感を抱き易く、感情を投影しやすい可能性を示しているのではないだろうか。

イルカでは、親和感情、擬人化的表現、個体の識別に関することばが多く得られた（Table 7）。親和感情、擬人化的な表現は上記のラッコとほぼ同じであり、「可愛い」や「遊んでる」などのことばが得られた。これは、やはりイルカが哺乳類であること、そこから、人がイルカに対して非常に好意的なイメージを持っていることが伺える。また、ラッコ同様、イルカにも擬人化的な表現が得られたことは、ラッコと同じく、人がイルカに対し親近感を抱き易く、感情を投影しやすいのではないか、という可能性を示している。また、イルカで特筆すべき点として、個体の識別に関することばが多く得られたことが挙げられる。「あの子、さっきからコー

ドで遊んでない?」「この子、さっき私たちの方観てたよね?」など、協力者たちは、イルカを、複数をまとめた動物ではなく、個体の存在として認識していることが伺える。これは、他の動物とは大きく違う点である。これは、人がイルカを自分たちと同じ個体差がある動物として認識していることの表れであると考えられる。つまり、われわれは、自らと非常に近い存在として、イルカを認識していると考えられるのだ。

AAT・AAAにおける動物たちの効果の一つに「社会的効果」がある。この社会的効果は、人の対話場面に動物がいるとき、動物を介した話題が増えることで、会話の促進が期待できるというものである（「社会的潤滑油（横山，1996）」）。今回の結果からは、6つの水槽にいる動物たちのどれもが、協力者たちの会話を促進した。これは、どの動物も、社会的潤滑油の効果を持ちえ、AAT・AAAの場面で、われわれに働きかけることができる可能性を示唆している。

また、今回、協力者たちの会話のなかで、「この子、さっき私たちの方みてたよね?」など個体の識別にまで及んだのは、イルカのみであった。これは、つまり、他の動物とは大きく違い、人がイルカの個々に注目し、ことばを交わしているということであり、特筆すべき結果である。この結果は、人が、イルカを自分たちと同じ個性のある存在として認識していると考えられ、他の動物よりも近い存在としてイルカをみている可能性がある。Levinson (1969) は、面接に介在する動物は、子どもなど、ことばで自己を表現することが難しいクライアントが自己を投影することのできるものだ、と述べている。このイルカへの親近感、人がより円滑に、自己を投影することができる可能性を示しているだろう。この結果は、AAT・AAAを検討する上で、一つの指標となったと言える。

今後、より多くの人物によるデータを収集するとともに、動物の選択肢もより増やした形で、人のことばの比較を行い、さらなる検討が求め

られる。

引用・参考文献

- ・ Akiyama, J. Ohta, M. (2006). Increased Number of Whistled of Bottlenose Dolphins, *Tursiops truncatus*, Arising from Interaction with People. *Japanese Society of Veterinary Science*, 165-170
- ・ 林義弘 (1999). 検証アニマルセラピー 講談社 東京
- ・ 石田雅人・漆原宏次・高岡忍 (2008). 実地体験を通じた心理学教育の深化－イルカ介在活動への参加・観察から－ 大阪教育大学紀要 第IV部門, 57, 15-25
- ・ 岩本隆茂・福井至 (2001). アニマル・セラピーの理論と実際 培風館 東京
- ・ 加田陽子・石田雅人・高岡忍 (2009). 自閉症児を対象としたイルカ介在活動の効果－香川県さぬき市での実践事例から－ 大阪教育大学紀要 第IV部門, 57, 39-52
- ・ 門多真弥・森坂匡通・亀崎直樹・大矢大 (2014). アニマルセラピーとしての“イルカ療法”－イルカとのふれあいを通じて－ 京都女子大学発達教育学研究, 8, 55-60
- ・ 門多真弥・亀崎直樹・大矢大・他 (2013). 水族園来園者のパーソナリティとイルカイメージの検討－ Dolphin Assisted Therapy(DAT)・Dolphin Assisted Activity(DAA)への健常者を対象にした基礎研究－. 京都女子大学発達教育学研究, 7, 49-60
- ・ 門多真弥・大矢大・古池若葉 他 (2012). 「アニマルセラピー」における動物イメージについて 京都女子大学大学院こころの相談室心理臨床研究, 6, 35-45
- ・ 川喜田二郎 (1967). 発想法 中央公論社 東京
- ・ 木谷秀勝・宮崎佳代子・石村真理子・西川麻里子・坪崎仁美・市野瀬かの子 (2005). 発達障害児へのイルカ介在療法の展望に関する一考察－ JDATと下関市海響館での活動を中心に－ 教育実践総合センター研究紀要, 19, 127-133
- ・ 近藤尚也・安井友康 (2011). 重度身体障害者の乗馬療法における記述的記録を通じた評価の試み

- 北海道教育大学紀要, 教育科学編, 61 (2), 121-129
- ・ Levinson B. M. (1962). The dog as a "co-therapist". *Mental Hygiene*. 179, 46-59.
- ・ Levinson, B. M. (1969). *Pet-oriented child psychotherapy*. Charles C. Thomas, Publisher. Springfield, IL (川原隆造訳 (2002). 子どものためのアニマルセラピー 日本評論社 東京)
- ・ Levinson, B. M. (1978). Pets And Personality Development. *Psychological Reports*. 42, 1031-1038
- ・ Levinson, B. M. (1979). The Aquarium as a Therapeutic Aid. *Psychological Reports*. 45, Issue, 577-578
- ・ Melson, G. F (2001). *Why the Wild Things Are: Animals in the Lives of Children*. Harvard University Press Boston (横山章光訳 (2007). 動物と子どもの関係学 - 発達心理から見た動物の意味 -, 星雲社 東京)
- ・ 小畑恵美子 (2009). イルカ介在療法の可能性を探る - 文献的考察を中心に 山口大学教育実践総合センター研究紀要, 28, 115-124
- ・ 小畑恵美子 (2010). 自閉症児へのイルカ介在療法の心理的効果に関する一考察 山口大学教育学部付属教育実践総合センター研究紀要, 30, 121-128
- ・ 尾形良子・今野洋子 (2008). 猫カフェ型 AAE における来場者の自由記述の分析 - グラウンデッド・セオリー・アプローチを用いて - 北翔大学北方圏学術情報センター年報, 1, 57-62
- ・ Pavlides, M. (2008). *Animal-assisted Interventions for Individuals with Autism*. Jessica Kingsley Publishers (古荘純一・横山章光訳 (2011). 自閉症のある人へのアニマルセラピー 明石書店 東京)
- ・ Reichert, E. (1994). Play and Animal-assisted therapy: A group-treatment model for sexually abused girls ages 9-13, *Family Therapy*, 21, 55-62
- ・ Smith, B. (1996). *Dolphin assisted Therapy* (青木薫訳 イルカ・セラピー) 講談社 東京
- ・ 高岡忍・漆原宏次・石田雅人 (2008). イルカ介在活動の効果に関する考察 - ある自閉症児の事例から - 大阪教育大学紀要 第IV部門, 56, 29-42
- ・ 太湯好子・小林春男・永瀬仁美・生長豊健 (2008). 認知症高齢者に対するイヌによる動物介在療法の有用性 川崎医療福祉学会誌, 17 (2), 353-361
- ・ 辻井正次 (2003). イルカ・セラピー入門 - 自閉症児のためのイルカ介在療法 プレーン出版 東京
- ・ 若島弘文 (2007). 犬と家族の心理学 - ドッグ・セラピー入門 - 北樹出版 東京
- ・ 渡辺聡・前田瑞枝 (2003). イヌとの接触が気分およびイメージに与える影響について - 好悪感情という観点からの検討 - 千葉大学教育学部研究紀要, 51, 219-223
- ・ 横山章光 (1996). アニマルセラピーとは何か. NHK ブックス 日本放送出版協会 東京